

服部茂幸『偽りの経済政策 格差と停滞のアベノミクス』 岩波新書 2107 年

●グループ発表の総括

1. 日銀の金融政策によって消費者物価指数の上昇やデフレ脱却は果たされておらず、日銀はその原因を外的要因などに挿げ替えて言い訳し続けている。
2. アベノミクスは「2%の物価上昇」「2%の実質 GDP の成長」「3%の名目 GDP の成長」この3つの公約は達成できていない。
3. 2008 年の世界同時不況で落ち込んだ経済を多くの先進国が立て直している中、日本は未だに経済が停滞しており、それはアベノミクスが効果を発揮していないことを示している。
4. アベノミクスの成果として挙げられる、雇用の増加は見せかけであり、実際にはアベノミクス期の雇用は全体的に減少している。
5. 現在の日本において、人口動態の変化などによって週 49 時間以上就業する長時間就業者が減少し、一方で女性や引退世代といった短時間就業者や非正規社員が増加している。
6. 経済成長の鍵である労働生産性の上昇は、その要である現役世代人口の減少、短時間就業者の増加が起きている現在の日本では望めない。
7. 労働生産性の上昇が望めないままでは中長期的な経済成長も見込めない。
8. アベノミクスが実施されているにも関わらず、現在の日本経済では実体経済・雇用・労働生産性の三つが停滞している。
9. 黒田のバズーカ砲やマイナス金利政策など、政府や日銀の間違った経済への考え方によって、日本経済はいまだにデフレ脱却をできておらず、経済成長を遂げられていないと言っても過言ではない。
10. アベノミクスによって企業の営業利益は上昇したが、拡大された利益が労働者の賃金に反映されることはなく格差を広げて終わった。

●評価・見解

アベノミクスが有効な効果を発揮できず、いま現在も日本経済が停滞したままなのは、筆者が挙げた様々な要因が関係しているが、私は日銀や政府の根本的な経済知識の誤りや自分たちの非を認めず責任転嫁をし続けるその姿勢が最も深刻な問題だと感じた。

また私が、政府や日銀がいま最も目を向けるべきだと感じたのは実質賃金上昇の達成である。現在のままでは上昇した企業の営業利益が実質給与や賞与に反映されず、格差だけが広がっていき、企業の業績改善→投資の拡大→賃金の増加→消費の拡大といった、持続的な経済成長モデルを実現することは不可能であり、永遠にデフレ脱却をすることが出来ず日本の経済は落ち込んでいく一方だと感じたからである。